① 兵十が、赤い井戸のところで、麦をといでいました。

## 語彙的・文法的意味・構造

・とぐ＝（動） ① 刃物などを砥石（といし）ですって鋭くする。「包丁を―・ぐ」 ②（多く「磨ぐ」と書く）水に入れてこすって洗う。「米を―・ぐ」 ③ みがいてつやを出す。

・赤い井戸＝常滑焼きの赭赤色の土管で作られた質素な井戸

・といでいました＝「とぐ」の持続態

## 指導の要領・留意点

・おっかあをなくしてしまった兵十は、今までは、おっかあがしてくれていたであろう食事の用意を自分でしかけている。背中を丸め、遠くを眺めたり、また、麦をといだりしている兵十の淋しそうな姿を描きださせる。

・この文で、ごんが兵十のようすを見ているのだということがわかるはずだ。

＊持続態であることから、ごんが見るより以前から、すでに麦をといでいることをおさえておきたい。

② 兵十は今まで、おっかあと二人きりで、貧しいくらしをしていたもので、おっかあが死んでしまっては、もう一人ぼっちでした。

③ ―おれと同じ一人ぼっちの兵十か―

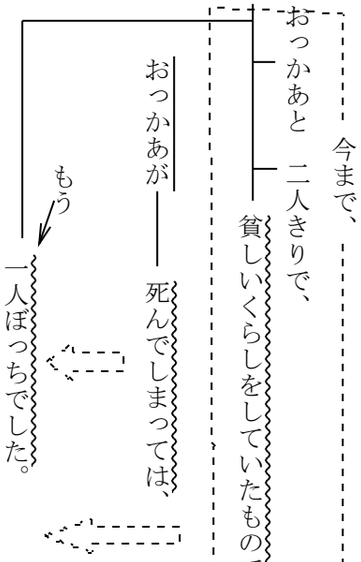
④ こちらの物置の後ろから見ていたごんは、そう思いました。

・きり＝限定を表す副助詞 ①「だけ」の意を表す。② 多くは、打ち消しをあとにともなって、「…を最後として」の意を表す。

・ ～ては＝条件の形・強調

・もう＝（副）①時やことがらが過ぎ去ったこと、進んでいることを示す。②時やことがらの近づいていることを示す。まもなく。やがて。「―くるだろう」 ③ さらに。この上なお。「―一杯ください」

・②の主文は、ふたまた述語文で、あわせ文と考えられる




・②の文は、兵十について二つのことが書いてある。

一つは、兵十はおっかあと二人きりで、貧しいくらしをしていたこと

二つめは、おっかあが死んでしまったので、ひとりぼっちになったことである。

そして、この二つのことは、兵十の寂しさ、心細さのわけでもある。家族が二人きりというのも寂しい。その上、小さな壊れかけた家に住み、貧しいのだ。が、貧しくても、二人いれば、支えあうことができ、家族的な温かさもあっただろう。しかし、おっかあが死んでしまっては、兵十は、本当にひとりぼっちになってしまったのだ。ひとりになってしまうと、さびしさはよけい増してくるだろう。

ごんは、それを思いやっているのである。

これらのことは、二つの述語を手がかりとして、読みとらせたい。

ては（連語） ＊（新しく追加）

(1)ある事柄が実現した場合を仮定して、条件として示す。望ましくない事柄についていうことが多い。もし…したら。

「計画が敵に知られ―、せっかくの苦心も水の泡だ」「この辺は危険ですから、泳いではいけません」

(2)すでに行われた事実を条件として示し、それから生ずる事柄を示す後件に結び付ける。…した、それでは。

「こんなにお世話になっ―申し訳ありません」「そう言っ―みもふたもない」

(3)前件が成立すれば、必ず後件が成立するという場合、その前

件を表す。…するときはいつも…する。
「せい―事をしそんじる」「男も家族持ちになっ―、勝手気ままな生活を送ることはできない」
(4)繰り返される動作・作用について、前件と後件とを結ぶ。
「寄せ―返す浜の白波」「ころんでは起き、ころんでは起きて…」

ので（接助）　＊（新しく追加）
〔形式名詞「もの」に断定の助動詞「だ」の連用形「で」の付いたものから。一説に「で」は格助詞とも。話し言葉でのくだけた言い方では「もんで」ともなる〕活用語の連体形に接続する。原因・理由を表す。…ので。「あんまりはりきった―、ついしくじりました」「走ってきた―、息がきれる」

・兵十か＝（助）感動を表す助詞
①疑い、問いかけの気持ちをあらわす「どうしたらよいのだろうか」　②反語を表す「こんなことが、またとあろうか」③相手のことばに問い返したり、態度を責めたりする気持ちをあらわす「しっかりやれよ。いいか」④驚きや簡単の気持ちをあらわす「立派にできるではないか」⑤誘い・願い・頼みなどの気持ちをあらわす「出かけようではないか」⑥ひとり合点する気持ちをあらわす「もう、十二時か」
本文の場合は、⑥だが、④の意味も含まれる。

・そう―こそあどことば（指示代名詞）
ごんが思った中身を表す。「―おれと同じひとりぼっちの兵十か」を指し示す。

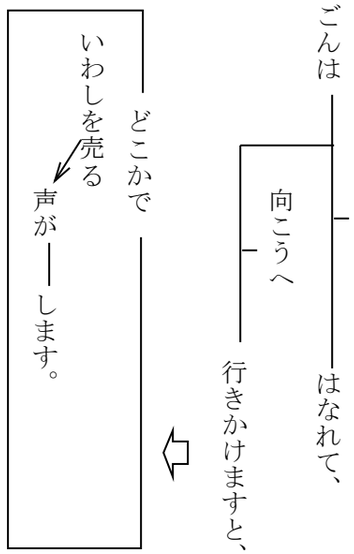
・①の兵十のようす、②のことなどに心を奪われているのが、の部分である。そして、思わず心の中でつぶやいたのが、「おれと同じ、ひとりぼっちの兵十か」だった。一章で学習したように、ごんはひとりぼっちで、ほらあなに住んでいたのだ。同じ立場、境遇になってしまった兵十に同情し、親しみを寄せていく。
　また、うなぎ事件のことから、兵十をひとりぼっちにさせてしまった原因の一端は自分にもあると思いこんでいるごんは、兵十への申し訳なさもあって、思いがつのっていくのである。

・こちらの物置―物置がごんに近いことを示す。

・「ちょっ、あんないたずらをしなけりゃよかった」と後悔したごんは、兵十のことが気にかかり、兵十の家の物置の後ろにかくれて、兵十のようすを見たり、「おれと同じ、ひとりぼっちの兵十か」と考えたりしていたのだ。

・「そう」が指し示す部分を「　」でくくらせる。

⑤ごんは物置のそばをはなれて、向うへいきかけますと、どこかで、いわしを売る声がします。
⑥「いわしの安売りだあい。生きのいいいわしだあい。」




つきそい文に述語が二つある。物置のそばを離れたことと、行きかけたことである。

・行きかける＝すがたをあらわす合わせ単語
　動きのとっかかりを示す。

・生き＝①生きること。生きながらえること。　②生魚が新鮮

・兵十のことをいろいろ思いやったごんが、物置のそばを離れて、どこかへ行こうとしていることがわかる。その時、いわしを売る声がした。ごんは、思わず立ち止まったにちがいない。

・「ごんは、物置のそばをはなれて…」は、一般的には、「ごんが…」になるのだが、ここでは、物置のそばを離れるということにニュース性をおいたため、「ごんは…」になっているのではないか。しかし、大きなちがいはない。

・「…声がします」　現在形を使っている。これは、この後、いわしと兵十、ごんのかかわりが大きいことから、強調として用いられているのだろう。
　＊物語の「地の文」における現在形の使われる意味については、「父ちゃんの凧」や「文図の効用」を参照。

・「…だあい。…だあい。」で、遠くの方から大きな声でさけんでいるのがわかる。

であること（「活き」とも書く）

⑦ごんは、その、いせいのいい声のする方へ走っていきました。
「いわしをおくれ。」
と言いました。

・いせい＝①威圧するような勢い「大軍をもって、ーの程を示す」　②活気をおびた元気。いきおい　「ーのいい若者」

・その＝いわし売りの言ったことばをさししめす

・走っていきました＝遠のき態
　走りました
　走ってきました
　走っていきました　　比較

「と」＝「すると」の意味だが、時間的に短く、突然何かが起こったりしたときに使う。

・ごんは、いわし売りの声のする方へ、すぐ走っていった。このことから、ごんの好奇心の強さがうかがえる。おもしろそうなことには、何でも興味を示すのだ。

・走っていっていると、弥助のおかみさんが、裏戸口から出て、「いわしをおくれ」と言った。ごんは、急に立ち止まっただろう。「と」から、突然で、ごんがびっくりしたようすや気持ちを読みとらせる。
　ごんは、とっさにどこかにかくれたかもしれない。

⑧　と、弥助のおかみさんが、裏戸口から、

⑨いわし売りは、いわしのかごをつんだ車を、道ばたにおいて、ぴかぴか光るいわしを両手でつかんで、弥助のうちの中へ持って入りました。

・ぴかぴか光るいわし＝太陽の光に当たって、うろこが光っていること、いわしの新鮮さを強調している。

・つかむ＝①物をしっかりと手でにぎる。　②ものごとの重要点をとらえる　③自分のものとする

・この文は、三つのことがらが書かれている。
　ア、いわし売りは、車を道ばたにおいている。その車には、かごが積んであり、そのかごの中には、いわしが入っている。
　イ、ぴかぴか光る新鮮ないわしを両手でつかんだこと。両手でつかむのだから、一匹や二匹ではないだろう。
　ウ、弥助の家へ、そのいわしを持って入った。持って入ったということは、売りに入ったこと。

・これらのようすを、ごんはじっと見ているのだ。

⑩ごんはそのすきまに、かごの中から、五、六ぴきのいわしをつかみ出して、もと来た方へかけだしました。

・すきま＝①物と物との間のあいている所。「戸のーから、風がはいる」　②仕事などの手があいているとき。手すき。「ーを見ては、勉強する」

・つかみ出す＝つかむ＋出す

・そのすきまーいわし売りが弥助の家へいわしを売りに入っていった間のこと

・かごは道ばたの上にあるので、ごんは、そこからいわしを五、六匹つかみ出した。選んだりするひまもないほど急いでいることがわかる。

・もと来た方ーごんは、兵十の家の物置の後ろから歩きかけて、いわし売りの声を聞き、いわし売りの方へ走っていき、弥助のおかみさんの声で急に立ち止まって、いわし売りのようすを見ていたのだから、「もと来た方」は、兵十の家の方である。

・ごんは、兵十の家の方へ走り出した。急いでいることがわかる。

⑪　そして、兵十の家の裏口から、家の中へいわしを投げこんで、穴へ向かってかけもどりました。

・投げこむ＝投げる＋こむ
・こむ＝（接尾）動詞の連用形につく
　①ものごとを十分にする。徹底的に行う「芸を教え―」②中に入れる。押し入れる「定員以上につめ―」
・かけもどる＝かける＋もどる

・主語（ごんは）が省かれているが、容易にわかるだろう。
・ごんは、五、六匹のいわしを、兵十のうちの中へ投げ入れて、自分の住んでいるあなの方へ向かって、走って帰った。「投げこんで」という表現から、やや荒っぽさはあるが、非常に急いでいたということもわかる。さら、「あなに向かって」や「かけもどりました」からも、脇目もふらずに一目散に走って帰ったこと、急いでいたのだということがわかる。いわし売りに気づかれてもいけないし、兵十に気づかれてもいけない。だから、大急ぎでかけもどったのである。

⑫　とちゅうの坂の上でふりかえってみますと、兵十がまだ、井戸のところで麦をといでいるのが小さく見えました。

・ふり返ってみる＝もくろみ動詞（既出）
・まだ＝陳述副詞―副詞によく似ていて、話し手の気持ちをあらわす単語＝変化のときについての判断

とちゅうの坂の上で――――
（ごんが）――――ふりかえってみますと、

井戸の所で――――
兵十が――――まだ麦を――――といでいるのが――見えました。

ごんは、うなぎのつぐないに、まず一つ、いいことをしたと思いました。

・ごんは、兵十の家にいわしを投げこんでかけもどる途中、兵十はどうしているだろうかと気になって、坂の上でふり返った。
・まだ―ごんの動作がすばやかったこと
　「まだやっているのか」という気持ち。
　おっかあが死んで、ひとりぼっちになってしまった兵十が、何ごとも手につかず、ぼんやりとしているようす。かわいそうになあという気持ちをよみとることができる。
　＊これは、読み過ぎのような気もするが？
・小さく見えました―兵十の家から坂の上まで、いくらか距離があるのだろうが、兵十がいつまでも麦をといでいる状態を見ると、ごんには、ひとりぼっちのさびしさがわかり、よけい小さく見えたにちがいない。

⑬　ごんは、うなぎのつぐないに、まず一つ、いいことをしたと思いました。

・つぐない＝つぐなうこと。また、そのための金銭、ものなど。
＊つぐなう＝(1)埋め合わせをする。特に、弁償する。「それで家の方の経済は、収支―・ふのかい/それから（漱石）」(2)罪やあやまちの埋め合わせをする。「刑に服して罪を―・う」
＊まず＝（副）(1)他のことに先んじて。最初に。第一に。「―私から報告いたします」　(2)何はともあれ。ともかく。「―一休み」　(3)だいたいのところ。一応。おおよそ。「―これでよし」　(4)（打ち消しの語を伴って）ほとんど。「―助からないだろう」「―来ないだろう」
＊本文の「に格」は、「目的」を表す。

ごんは――――――――――――――――――――――思いました。
　　（おれは）――――――――――――――――――――――いいことをした
　　うなぎのつぐないに　　まず一つ

・ごんが思った中身に、「　」をさせる。
　（うなぎのつぐないに、まず一つ、いいことをした）
・「うなぎのつぐない」とは何かを考えさせることによって、ごんの兵十に対する気持ちがより鮮明になってくる。
・「まず一つ」の「まず」で、これが一番初めということだから、これからもいいことを次々にしようと思っていることがわかる。そして、一ついいことができたことに得心して、何となく晴れやかな気持ちになっているごんである。